



冬のボーナスカットを許さないぞ！シリーズ⑱

現場社員、怒り・絶望感が蔓延！ 2.2ヶ月は精一杯な回答と逃げる会社 2020年度年末手当再申し入れ団交

本部は本日、2020年度年末手当の再申し入れの団体交渉を開催しました。2.2ヶ月の回答に対し、現場で働く社員からは「ローン返すのが精一杯」「あまりにも少なすぎる」「今までと同じ仕事をしていて納得いかない」などの意見が吹き荒れていました。本部は、このような意見を会社につけてきました。

役員報酬10%カットに対して、会社は「社員27%カットは今回のボーナスだけ。年収に換算すると9.1%だ」と主張しました。本部は「それでもほぼ同率だ。役員の収入は桁が違う。役員はぬくぬくしすぎだ」と反論しました。

安定的支給ベースについて本部は、「他労組含めて、安定的に支給されるべきベースのことであるという認識だ。会社が勝手に解釈を歪めた。過去の見解と全く違う」と主張しました。しかし、会社は「最低ベースだとは言っていない」と開き直りました。さらに本部は「最低とは安定的ということだ。今後『不安定支給ベース』と言え」と迫りました。

ボーナスよりリニア建設を優先させていることに対し、本部は「まともなボーナスを払えないなら、リニアは即刻中止せよ。中止するなら今が絶好のチャンスだ」と主張しました。しかし、会社は「リニア建設費とは別会計だ」と逃げました。

多額な内部留保金について、会社は「設備投資、商業ペーパーなどの返済、法人税などの使い方があり、自由に使えることはできない」と言い訳を並べました。本部は「ボーナスも使うべき資金だ」と主張しました。

最後に、会社が2.2ヶ月を撤回する気がなかったら、「慰労の意味を込めて10万円でもプラスせよ」と主張しましたが、会社は頑なな態度を変えることはありませんでした。

全てにおいて議論は対立し、本部は持ち帰り検討することにしました。